JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2012年11月30日発行 ・・・ 所報No.356

目次

132回、133回、134回スウェーデン研究連続講座

132回
被災地市民が見た一筋の光～持続可能先進国スウェーデンの現状　お茶芽クラブ芽芽代表　植木秀子

133回
スウェーデンにおける介護福祉機器と技術開発　スウェーデン介護福祉機器技術開発所研究部長　Dr.Claes Tjader

134回
スウェーデンの演劇とストリンドベリィの女優たち　女優・脚本家　毛利まこ

シリーズ

スウェーデン留学体験シリーズ　アンケートから(8)

JISS所報原稿募集

スウェーデン社会研究所　所報
No.356 2012年11月30日発行

発行所：社団法人スウェーデン社会研究所
〒105-0013　東京都港区浜松町1-8-1
㈱科学新聞社内5階
連絡事務所
〒124-0024　東京都葛飾区新小岩2-19-7
Tel. 03-5661-6035 Fax. 03-3655-1596
e-mail：jiss12@nifty.com
URL：http://www.sweden-jiss.com/index.html

発行人・編集責任者：野崎俊一
Publisher&Editor in Chief : Shunichi Nozaki
編集者：久保田健司
Editor : Takeshi Kubota

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

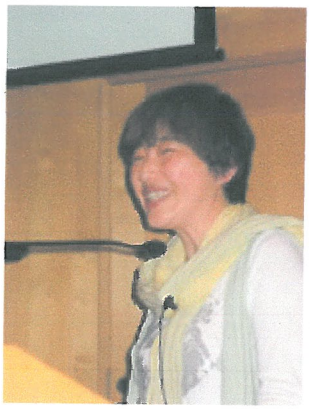
JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2012年11月30日発行 ・・・ 所報No.356

第132回スウェーデン社会研究所連続講座
被災地市民が見た一筋の光～持続可能先進国スウェーデン

お茶芽糸クラブ歩歩代表　植木秀子



要旨のまとめ

・私は福島県いわき市の住民でしたが、2011年3月11日に発生した東北大地震の被災者です。以来、一時避難の名のもとに都内を六度にわたり転居、現在は新宿区内にある都営住宅で一家四人の避難生活をしています。この避難生活の中でスウェーデン大使館が主催した避難民交流に参加したことを契機に、スウェーデンや「エコーシティ・マルメ」の先進国ぶりを知り、市民が安心して暮らせる住宅・環境問題などに関心が深まりました。その矢先、「持続可能な社会を目指すスウェーデン市民と出会う旅」を主催するNPO団体の短期研修ツァー（2012年2月）にいわき市からの助成金援助もあって参加しました。以下は現地レポートです。

・「ツアーコース」 首都・ストックホルム、原子炉の最終処分予定地として知られるウップサラ・エストハンマー、北部・ウメオの三都市。環境、エネルギー・教育の三部門を中心に施設見学や関係者との交流などを図りました。この三部門はそれぞれが独立する事なく、お互いが相互に連携し、また融合し、スウェーデン人の考えが「合理的で頭がいい国民」と言う印象を随所で感じました。

・「原子力発電・使用済み核燃料最終処分予定地の工場見学」 過去の国民投票の結果、今日までに国内で既に2基が廃炉していると聞かされ、国民の原子炉発電に対する感情を知りたかった。一連の見学と関係者の話から「作ってしまった事に対する事よりもこれからどうするのかという視点に重点を置いている国民性」と思うとともに、今の日本は最終処分地の構想も知らされていないと言う将来への不安感を抱きました。

訪れたのは核燃料最終処分予定地、エストハンマーにあるSKB社。外部施設の写真撮影は禁止など、行動に一部制限はあった。また、地元採用の広報官の話で驚き、感心したことは、「最終処分地をリサーチするのに自然生態の影響はどうなるのかなどお互いが納得するまで20年以上の長い年月をかけている。そして会社側が提出した調査表は7千枚に及ぶなど、コミニューケィションが図られており、10万年先の安全性に責任を持ち、真剣に取り組んでいるという「意識の差」でした。

・「バイオガス工場の視察」 ゴミ分別と発酵システムから得たエネルギーのバイオガス工場は、原発とは違って「目に見える安心感」の思いを強くした。また、街中を走るバイオガスのバス、地域暖房が普及している現実などを体験をし、「寒い思いをしている被災地の避難家屋にもあればいいのになぁ」との思いをしました。施設の稼働システムを聞いていたら、日本でもスウェーデンと同じ様に創意・工夫を図れば充分可能なのに、なぜ国は取り組まないのかと素朴な疑問がわきました。例えば、今、被災地では瓦礫の山があり、その処分方法は遅々として進んでいません。しかし、わが国の江戸時代のゴミ問題は世界に類を見ない完全循環型でした。その先例もあり、私は「ゴミはお金になり、エネルギーにする練金術」のヒントが隠されていると思います。また、街中に目を向ければ、ゴミの分別の徹底化や自転車専用道路の利便性、1人で作業をこなすゴミ清掃車など、「安心して快適に暮らす」姿勢を随所で体験できました。

・「自然に感謝」 街中を歩いていると、この国は滅茶苦茶寒い国と言うことを実感するとともに、嬉しくもなり、幸せの気分にもなりました。ストックホルム市街地の湖は氷がはり、その上にはリスの足跡があったりする。それを見ていると、気分がゆったりし、心も温かく、豊かな気分になりました。これは「スウェーデン人は自然に適応し、感謝している表われ」ではないか。日本人は自然の豊かさに恵まれているのに感謝の念が少し足りないのではないかと言うことを学びました。

・「ペレット使用のエコ住宅」 持ち主は、「持続可能な復興の原則」をテーマで日本に講演依頼をされたり、国連やブータンからも講演依頼があるというトレビューさん。中古住宅を改造し、室内はバイオを活用しており、その事例の一

つはトイレ。分別回収トイレ、水の使い分けにも工夫の数々があった。この見学から学んだことは、「環境は自宅にある」。つまり、「環境問題は人ごとではなく、自分自身だった」と言うことです。

・「教育・自然学校で給食体験」 これは日本での小学生を対象にした逸話ですが、「氷が溶けたら何になる」の質問に対し、「水になる」とは別に「春になる」と答えた児童もいた。日本流の正解は前者の「水」ですが、スウェーデンでは、後者の「春になる」も正解にするのではないかと言う物事に対する柔軟性を感じました。それは現地の公立基礎学校の自然学校で児童・生徒とともに「凍った湖」で氷を削って彫刻したり、水の中に跳び込むという見学や体験をしたからです。自然の中での遊ぶ楽しみや恐ろしさを同時に学ぶ事はごく当たり前のカリキュラムになっていました。それと同時にスウェーデン人は「自然の恵みに感謝している」と言う気持ちが強いことを改めて感じました。それは氷の授業にみる、五感を大切にした実践体験行動です。応対してくださった先生の言葉の中に「学ぶということは乾いていること、空腹でないこと、そして安心していること。これがないとそこから先に生徒は学べません」が印象に残っています。つまり、「聞いて忘れ、見て分かり、やって出来る」ということでしょうか。また、給食時には上級生が下級生に対し食事マナーなど「めんどうを見ている」シーンも目撃するなど、スウェーデン流教育の一端に触れることができました。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

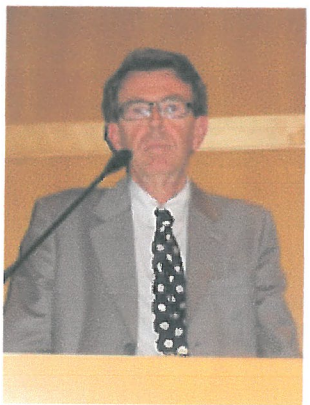
JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2012年11月30日発行 ・・・ 所報No.356

第133回スウェーデン社会研究講座
スウェーデンにおける介護福祉機器と技術開発の現状

スウェーデン介護福祉機器技術開発研究所
(Swedish Institute of Assistive Technology SIAT)研究部長Dr. Claes Tjader



私どもの研究所スタッフは総勢83人。色々なバックグランドを持ち、市、県や中央機関からのサポートを受けています。主に二つの分野に従事し、お互いが共に共通したことや，時には違ったこともありますが、そのひとつは高齢者問題、もうひとつは障害を持つ人たちに対するサポートです。わが国の年齢構成の流れもあって、現在は高齢者についての関心がより高まっているように見受けられます。また、技術開発のほか、福祉機器の改善についての研修もしています。研究所の名称は当初、「ハンディキャップ」と言う言葉を使っていましたが、この言葉は適当ではないとされ、現在の名称に代わりました。

これからお話するのは、人口統計の流れ、福祉機器に関する技術、在宅サポートのあり方、また、これらの機器使用については利用者側にも選択肢があるということ、さらに認知障害者と機器の関係、最後に精神障害者と機器についても触れたいと思います。

スウェーデンでは65歳以上が全人口に占める比率ですが2008年は18%でした。これが2060年になると25%にアップします。この数字は何を意味するかと言いますと、16歳から64歳のいわゆる働き手の若い年齢層が減少することにほかならず、さらにこの人口推移は経済発展と密接な関係があります。WHO(世界保健機関)の情報に寄ると、この人口推移で劇的な変化があるものとして低・中開発国をあげています。2050年までには高齢化が進み、中国やブラジルはアメリカより高齢化率が進んでいると予測しています。つまり、重要なことは、今、低・中開発国で起きている高齢化現象は早いスピードで進み、従って対応する準備期間が短いことを意味します。

このため、既に経験した先進国は、持っている福祉関連の技術などをこれら低・中開発国に提供する必要があります。既にいくつかの国では、こうした福祉関連の機器が普及し始めていると聞いていますし、その活動は主として民間団体です。例えば私は先日、韓国に行き、この国では若い世代層にこうした機器が支給されていると聞きました。

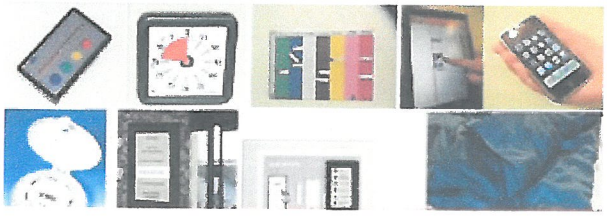
さて、スウェーデンに話を戻しますと、人口850万人の約20%の人たちは何らかの障害を持っている。また、65歳以上の人たちは18%に達し、福祉機器の75%はこうした年齢層で使われている数字があります。通常、この機器は無償で、管理・支給については地方分権制度に基づき、地方自治体の市であるコミューンの責任で行われています。写真の手押し車は若い人から高齢者層まで一般的に広く使われているものですが、この手押し車は外出時や健康向上にも役立つなど、便利なスグレものです

私ども福祉機器と言う時にはハードウェア製品のことですが、情報サービス面も増えています。例えば、ソフトウェアをダウンロードして色々な薬の用法を知らせるというサービスもその一つです。

先ほど、地方自治体の責任・担当の話をしましたが、高齢者の健全な生活を維持する在宅ケアもそうです。その内容

事例としては多いのは補助金、それから聴覚・視覚レベルを助けたり、失禁に関する製品アドバイスなどあります。つまり、福祉機器は重宝されるとともに、機能性についても重要な要素になっており、この福祉機器を使った生活は高齢者にとっては自立した生活と生きがいをもたらし、また、公共負担という観点からも財政軽減につながるメリットがあります。
実際、これまでの「施設の増設」という施策から、既存施設を活用し、「使い勝手のよい」在宅サービスに方針が転換されるとともに、在宅ケアを助ける福祉機器の技術開発が望まれています。また、自宅のバリアフリーなど改造する時はコミューンから補助金が援助され、このほか家族によるサポート、アクセスのしやすさ、親しい友らのケアもなされています。

また、高齢者や障害者らが生活をするうえで、各種の福祉・介護サービスがあります。それは電話サービスに伴う機器、また、緊急を知らせるアラーム関係機器など様々の機器です。写真で説明しますと、左上の機器は外出時の緊急呼び出し。ボタンを押すと電話がかかってくる。また、かかってこない時は確認ができるようになっている。真ん中の写真はコミューケイションを図る機器で、その右は夜間での様子を見る機器。左下は介護する人がモバイバルで室内に入りやすくための機器で、その右隣の写真は端末機やパソコンを使わずに音声で繋がる機器。この機器は既に市販されており、一般消費者向け機器であっても障害者にも使える便利な物が出てきています。
こうした福祉機器は専門家によって開発された機器ですが、ユーザ側の気持ちとしては自分たちが支給されるということばかりでなく、自分たちにも機器を選んで使えるという選択肢の道が開け、いくつかのコミューンでは事例があります。
次に認知障害者と機器について。医療面からみますと、発病や原因などはこれまでは非常に分かり難い分野でした。いくつかの原因によって脳卒中であったり、その他の原因で認知障害と言うことが起きるなど注目されるようになってきました。そもそも、この認知能力は加齢とともに衰え、ある限界を超えるような認知障害を持つようになると、こんなことが起こります。現在、スウェーデン人のうち、約100万人はインターネットを使っていません。情報化時代にあって「情報が行き渡らない」ことは本人にとってはもちろんのこと、社会全体の見地からも損失に繋がります。このため、こうした人たちの「劣化を防ぐ」ための機器の技術開発は必要なことです。それは、どんな機器かと言いますと、日常生活の段取りを助けたり、時間を理解するため、また、忘れることに対するサポート、新しい生活環境に順応出来る機器など多種多様にわたります。しかし、これらをホローアップし、技術開発するには時間がかかります。
2009年に、研究所は精神障害者のための福祉機器開発の諮問を受けています。これは先に国が進めている障害者福祉改革の一連のもので、人権の差別禁止思想のもと、施設の撤廃とともに、もっと福祉機器の活用ができるようにという狙いからです。これを受けての技術開発はどんな機器があるかと言いますと、「行動の開始と終了」、「物事を計画するための準備と終了」、「時間の観念を理解すること」、「夜と昼のリズムを理解すること」をリードすることに役立つ機器です。それが出来上がったものとしては、時間の観念を示す機器、一日のスケジュールボード、それをデジカル化した機器、さらにはソフトを入れて他の人にはそれが精神障害用の機器と分からないようにしてあるとか、薬入れケース、ロックの表示器などがあります。具体的に説明しましょう。



左上の2コマは時間の観念を示す機器。シャワーなど浴びていてどれぐらいの時間が経過したか分からない時にはランプが順次に進み、その時間帯を点灯表示するものです。その隣りは一日のスケジュールボードで、右端はそれをデジカル化したもの。最右端の機器はその端末機でソフトが内蔵されている便利なものでして、これは障害者用機器とは見た目には分からない。左下は薬入れケース。その右隣りは外出時の指示器。カギのかかった機器は、外出した時にロックがかかっているかどうかを確認する時に部屋に戻らなくても確認が表示してくれる。右端下の写真はキルト。商品開発ではうまくいったケースの機器です。各種の防具材があるため7㌔の重さがありますが、重さの調整をすることによって気持ちよく眠れ、睡眠薬などの使用量が減った事例が報告されています。反面、先ほども説明しましたが、機器の開発には時間と費用もかかり、さらにその対価効果も問われます。
この点については、このキルトの機器の場合はコミューンや県からのサポート費用があり、これにもろもろのことを換

算しますと、開発にかかったコスト3万1千Skrは1年半で元がとれることが分かりました。このように、良い機器は本人にとっては社会復帰への道が開けると言う励みになるし、社会にとっても財政削減に繋がります。しかし、精神障害者のための機器は充分に行き渡っていないのが現状でして、機器の活用率も物足りない。しかし、今まで説明しました福祉機器は高齢者向けばかりでなく精神障害者にも使えて、かつ効果もあるということを分かっていただけたかと思います。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2012年11月30日発行 ・・・ 所報No.356

第134回スウェーデン社会研究講座
スウェーデンの演劇とストリンドベリィの女優たち

女優・脚本家　毛利まこ

私はこれまでの16年間、この大使館などでストリンドベリィの演劇を演じてきた立場から研究家、学者でもない、一女優としての立場からお話をさせて頂きたいと思います。まずは自己紹介から。なぜ、ストリンドベリィに関わってきたのから。20代の大学生の時に演劇に目覚め、舞台女優になろうと「円」という研究所の養成所で勉強をしてきました。その折に劇団民芸の宮内満也先生のアウグスト・ストリンドベリィのプロデュース公演で、女中頭・クリスティン役に抜擢してくださいました。その時、初めて台本を見た時に、「これはなんと難しい劇。私にはわからないわ」と思ったのが最初の印象でした。そして練習が進んでいくうちに、中堅からベテラン俳優さんたちがドラマの中盤から終盤に進む台詞のやり取りはすざましいバトルの応酬でした。
「(台詞が)ここまで言うの？　ここまで相手を傷つけるの？　これはすごい劇。ここまで罵り合うのは日本の演劇にはなかった。これがバイキングの国、スウェーデンの劇なのかしら」。そして、これが私にとってストリンドベリーにはまっていった原因ではないかと思います。それから20代の終わりごろに単身、スウェーデンに留学し、そのころに王立劇場で見たイングマール・ベルイマンの「令嬢ジュリー」と「ハムレット」に身体の震えるほどの興奮をしたことを思い出します。
そして帰国後、私は京都出身ですから、これに神戸、東京の三都市の劇場で「令嬢ジュリー」をプロデュースし、公演を致しました。しかし、これは単なるプロデュース公演なので一回立ち上げたら一度限りの花火のようにこれでおしまいになり、解散の形になってしまう。「これではいけない」と劇団を立ち上げ、活動を積み重ねる方法を取ろうと思いました。その時の劇団の名前は「ピストル射撃団」。ネーミングの謂れはストリンドベリィの台詞の中に「俳優はピストルだ」と言うのがある。これは銃口を相手に向けるのではなく自分に向ける意味は、「己に向かいあい、切磋琢磨をする」という喩えからによるものです。しかし、その時の劇団員はまだ三人だけでした。そこで私はひとり芝居の「白夜の恋」を台本化し、公演しました。これが今の駐日大使、ラ―シュ・ヴァリエさんの目にとまり、さらに演出家の力もあって大使館での公演をすることにこぎ着けられました。16年前のことです。それから毎年一回、この大使館で公演させていただいています。
　このオ―ディトリアムは芝居小屋としてはマジックのようにガラッと変わる。これは劇団グスタフのなせる技だと思います。ここで劇団グスタフのことをさせて頂きます。今の私はこの劇団から離れていますが、これは少し離れた位置から私自身を見つめ直そうということからです。まずは劇団名。大使から「ピストル射撃団と言うのはちょっと刺激的ではないですか。名前を代えて、グスタフはどうですか」と言われました。この名前はスウェーデンでは知られた国王カール16世のこと。これがきっかけとなり、改名致しました。
活動歴としては先ほど申しましたように、毎年一回、大使館内でストリンドベリィ作品を上演してきました。この作品は日本人にはなじみの少ないものですが、人間心理を深く洞察し、鋭い視点で描かれる人間関係は、文化の違いが持つ新鮮な驚きと発見、また、それぞれの文化が持つ良し悪しを改めて考えさせられます。近年はこの作品に限らず現代作家の作品にも意欲的に取り組み、これまでにないグスタフの世界観を広げています。
また、東京・狛江に100人収容できる劇場と稽古場を持ち、アメリカ、ロシア、日本演劇の中で「人間が生きていくドラマ」をテーマにした私の脚本を二月に一回ずつ公演しています。レパートリーとしては16年間の 大使館公演の作品と作家名は次の通りです。

＜舞台＞
「令嬢ジュリー」(A・ストリンドベリィ作)ジュリー役　94'成東のぎくソラ*
横浜赤レンガホール96' 98' 09'スウェーデン大使館内

さて、上演するに当たってはこの大使館一階にあるオ―ディトリアムを二階建ての空間を舞台セットにした

「火遊び」カースティン役 99'
「父」ラウラ役 00'
「フレンズ」ベルタ役 01'
「債鬼」テクラ役02'「強き者」X夫人役 02'
罪また罪」アンリエット役 03'
「幽霊ソナタ」老人役 04'
「恋の火遊び」シェスティン役 05'
「ヘム島の人々」フルードのおかみさん役 06'
「令嬢ジュリー」ジュリー嬢役　　09'
「強き者」X夫人役　　11'
以上ストリンドベリィ作品
「スタンダード・セレクション」(アグネータ・ブレイエル作)ラウラ役
「川の流れの中で」(ラーシュ・ノレーン作)ブレート 08'

のですが、演じる役者は狭くて急な階段の乗り降りという危険な中での劇でしたが、お客さんには別空間を感じて楽しんで頂けたと思います。上演した令嬢ジュリー、恋の火遊びなどの女性に見る作者・ストリンドベリィは女性を愛しているものの、すざましいまでの女性に対する憎悪はなぜなのかと言うことですが、それをお話する前にストリンドベリィのことを少し知って頂きたいと思います。

2.A・ストリンドベリィについて

1849年1月22日に誕生～1912年5月14日没
父はストックホルムで蒸気船代理業を営む、中流より上の家庭で
あったが彼は自らを"女中の子"として下層階級の出と考えてい
●彼の母が女給をしていたり父の家に雇われていた女だった。
彼女は正式結婚前に夫の子を三人生み、全部で12人生み、5人
くしている。彼女は40歳で肺病で他界、ストリンドベィの13歳の
父は若い家政婦と再婚、しかしこの継母と折り合う事は不可能だ
た。
母から受け継いだ熱しやすく、荒々しい気質、性格が彼を演劇界
近づける。また幼少の頃父の事業がどん底にありさまざまの悲
味わう。
1869年、20歳の時、物語の主人公を演じたいと王立ドラマ劇
門を叩く。演劇界への第一歩を踏み出す。

父親は当時の北欧気質の人と伝えられ、妻が亡くなった後には直ぐに再婚した。しかし、四男・ストリンドベリィはこの継母とはうまくいわず、その頃から対人関係も受け入れることが気難しいくなっていったのはこのころだとも言われています。そして彼の結婚歴のことです。生涯に三回の結婚をし、晩年は結婚に至らないまでも若い女性との仲もありました。最初はシリフォン・エッセー（1877年－1891年）、二番目がフリーダ・ウール（1893年－1894年）、そして三番目がハリエット・ポッセ（1900,年 －1906年）でした。また、結婚に至らなかったものとして婚約までしたフアンニー・フアルクナ―がいます。

シリフォンは美しい女性でした。ストリンドベリィは26歳で、彼女は25歳。彼女は男爵夫人で三歳の児がいたが、2人は恋仲になり、彼女が妊娠したことで男爵とは離婚。ストリンドベリィは舞台女優を希望する彼女のために、令嬢ジュリー、父、強き者などの脚本を手掛け、彼女の演劇デビューを支えました。しかし、児が亡くなり、また、ストリンドベリィは彼女との共演男優に嫉妬するなど結婚生活は憎悪なものとなり、16年間にわたる離婚訴訟となった。そしてまだ離婚の傷心が癒えない時にベルリンで女流記者・フリ―ダと出逢う。三カ月で求婚したが、直ぐに離婚するなどこの時期は地獄の時代と言われた。それは、フリ―ダの持参金を食いつぶすなど、シリフオンとの別れが痛手となっていて、子ども生まれたものの亡くした。また、フリ―ダの実家などに居候の身であり、一年でピリオドが打たれた。しかし、次のハリエット巡り合った頃から、彼の作品は復活し、特に1900年から02年の間は多作の年と言われた。作品のヒロインは全てハリエットが演じていた。この時の彼は52歳でハリエットは22歳であったが、この結婚生活もうまくいかなかった。フリ―ダの時と同じように求愛し、この時は女の子が生まれたが、結局は離婚している。こうしたこれまでの結婚歴から考えると、ストリンドベリィは実世界では夫に従い、平和な生活を望みつつ、知的な女性にはいつも不信感を持っていた。しかし、結婚相手はいずれも自立心の強い知的な女性を選び、そして結婚し、離婚の形になった。それも離婚は憎悪の果てにという形でした。

晩年の恋のフアンニ―のケース。死ぬ3年前の60歳の時でした。フアンニ―の年はちょっと分かりませんが、18歳から20歳の頃と思います。彼が当時住んでいた二階に彼女の一家がいて、彼女はいつもストリンドベリィに新聞を届ける役でした。フアンニ―はちょい役からストリンドベリィ脚本の復活祭の主役者に抜擢されるなどし、やがて婚約となる仲になった。しかし、フアンニ―の親は許さず解消、フアンニ―も彼が主宰する劇団の世界から離れてしまった。

こうしたストリンドベリィの女性たちとの結婚生活があって彼に影響を与えてきた作品の中から私が演じたものは下記の通りです。

スウェーデン大使館公演16年間の実績

上演年上演作品作家名

1996年 「令嬢ジュリ」―アウグスト・ストリンドベリィ
1997年 「ザ・リベンジャ」―(令嬢ジュリーより)アウグスト・ストリンドベリィ
1998年 「令嬢ジュリ」―アウグスト・ストリンドベリィ
1999年 「火あそび」―アウグスト・ストリンドベリィ
2000年 「父」―アウグスト・ストリンドベリィ
2001年 「フレンズ」―アウグスト・ストリンドベリィ
2002年 「債鬼・強き者(二作品上演)」―アウグスト・ストリンドベリィ
2003年 「罪また罪」―アウグスト・ストリンドベリィ
2004年 「幽霊ソナタ」―アウグスト・ストリンドベリィ
2005年 「恋の火遊び」―アウグスト・ストリンドベリィ
2006年 「スタンダード・セレクション」―アグネータ・ブレイエル
2007年 「ヘム島の人々」―アウグスト・ストリンドベリィ
2008年 「河の流れの中で」―ラーシュ・ノレーン
2009年 「令嬢ジュリ」―アウグスト・ストリンドベリィ
2010年 「人はみな罪を秘めて」―スティーグ・ダーゲルマン
2011年 「強き者」―A・ストリンドベリィ.「英の上」―三島由紀夫

この中で令嬢ジュリーのあらすじを説明します。夏至の白夜。人々にとって冬の閉ざされた時を超えて生命がうぶく一夜。その中で伯爵令嬢・ジュリーは婚約者に振られ、父は外出し、自分の気持ちが満たされないままに、そのはけ口として下男ジャンに求め、最後は逃げ場を失って自死に追い込まれる物語。この物語の劇を演じる側としてストリーは三つのパーツに分れる形になっています。最初はジュリーがジャンを誘うパーツ。そして一夜を共にした後は2人の仲の立場が逆転する。そして最後はこのあやまちの処置をどうしてよ

いのか分からなくて、結局はジャンに台詞の中で「GO」の声を浴びれされ、持たされたカミソリで自死に追い込まれるまでの役者の台詞や演技は非常にテクニックが求められるものになっています。もつとも私はジュリーは「死んでしまう」と解釈していますが、演じる別の劇団ではそこまで至らなかったなど、色んな解釈もしています。

特に中盤、ジュリーと下男ジャンが「恋と人生観」をめぐってのバトル台詞は間を外すと劇の全体リズムが崩れる難しいシーンになっています。つまり、女を愛したからこそ、生まれてくる「憎しみ」が必要になってくるわけですが、演じる者としては[ただ愛した]と言うだけではだめなのです。ここが難しいのです。演技としては、愛した後の憎悪が生まれてこなければストリンドベリィの劇は失敗します。ジュリー役を演じる時は重々しくて、体からは汗が吹き出します。それとともに心にも汗をかかないと、ストリンドベリィの劇は絶対に演じられません。また、台詞の中に「私は天使の中に悪をみた。可憐で美しいけれど無邪気の中に私は毒を持つ女なのかしら」があります。時には私もこんな風になるほど同化する気持ちがあるなど本当にストリンドベリィの作品に充実感を覚えます。私はこの難しいが故にこれに魅かれて演じてきました。私は50、60歳代になっても自分の肉体や声が20歳代の声として維持されていれば「新しいジュリー役」を演じたいと思っています。

最後にスウェーデンの演劇・芸能文化の動向について簡単に触れてみます。さる2006年の政権交代で文化予算は4年間で120億skrが消える厳しいものになっていると伝えられています。このため、スウェーデンの演劇人は「国家の援助に頼らず自分で稼ごう」と言う意向が強くなり、この結果、高いレベルの舞台創作の保持が困難になっているとか。また、小劇団は目新しい活動はやっていけない状況にある。ではどうしているかと言いますと、日本と同じように、集客力があるスターを起用しているようです。これとともにミュージカルや商業演劇が息を吹き返し、2012年のストリンドベリィ没後100年フェスティバル開催は不可能と言われていましたが、開催されました。そんな中、ストックホルム市立劇場ではアニアーラの舞台公演が開催された。この物語はノーベル文学賞受賞のハリー・マーティソンが1956年に書いたアニアーラ。環境汚染と核戦争から地球を脱出し、他の惑星に飛び立ったアニアーラ号は別の惑星に衝突し、宇宙に漂う。定員800人いる船内の中で人々が人生、哲学、性などをめぐって戸惑うという物語です。この舞台装置が面白いのです。普通、客はチケットをもらったら自分の客席に行きますが、この劇では客は舞台のそでから入り、舞台から降りて客席に行く。幕があくと、舞台側に鏡があるため、あたかも客が宇宙船に同乗している雰囲気が演出されているという仕掛けです。

また、人形姫劇では、児童向けに創作されたものですが、衣装は人形のうろこをスパンコールを使って成功しています。桜の園は芝居とダンスが融合されたプロダクションになっている。このように、今後のスウェーデン演劇界は不安材料がありますが、「才能ある人がいるからこそ芸術は進歩する」。そして才能ある人を育てるのは社会。経済ばかり目を向けていては決して良いものは生まれない。これは日本の演劇界としても同じことが言えるかと思います。今後の目標としては、スウェーデン演劇にこだわった人間としては、日本とスウェーデンの舞台交流を図っていきたいと思います。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2012年11月30日発行 ・・・ 所報No.356

スウェーデン留学体験シリーズ　アンケートから(8)K.Kさん

(2010年5月アンケート記入)

留学先　学校名:エリック・サールストロム・インスティテュート(Eric Sahlström institutet) 専攻:課程・留学形態:ニッケルハルパ・コース、私費留学　留学期間:2004年9月～2005年5月

留学の動機　なぜスウェーデンに留学しようと思いましたか？なぜ他の欧州・北欧諸国ではなくスウェーデンを選びましたか？
スウェーデンの伝統楽器ニッケルハルパを学ぶことが目的であったため

留学前の準備期間　留学を思い立ってから実際に現地へ出発するまで、どのくらいの準備期間が必要でしたか？
その3年前より留学を考えていたが、決意して実際の手続きを開始したのは4ヶ月前。現地の知人の協力なしには不可能だったと思う。

スウェーデン語や英語の勉強方法　日本またはスウェーデンで、語学をどのように勉強しましたか？
授業が全てスウェーデン語なので、英語ではなくスウェーデン語のみにしぼった。留学の3年前から月2回、先生の自宅を訪ねて個人レッスンを受けていたが、出発前の2月はほぼ毎日、仕事帰りの先生を喫茶店で待ち、集中的に必要なことのみ教えていただいた。

TISUS(大学入学のためのスウェーデン語試験)を受験したことはありますか？
ありません。

情報収集方法　どのようにして情報を集めましたか？
現地在住の日本人の知人(私にニッケルハルパを紹介した最初の師)が情報を教えてくれて、願書等も郵送してもらった。

現地の学校への問い合わせ　学校へはどのような方法で連絡を取りましたか？またどのような質問をしましたか？
郵送されたパンフレットを読み、こちらから願書等を郵送した。質問はしなかった。

出願　どのような書類(芸術系の場合は作品)をどこに提出しましたか？
送られてきた出願用紙への記入、大学の卒業証明書、銀行の残高証明書、作文(志望動機や将来への夢)、ニッケルハルパによる自分の演奏を録音したMD(初心者程度の演奏レベルは必要)以上を直接インスティテュートへ提出。

書類(作品)を提出する際に苦労した点はありますか？
志望動機等に関する作文をスウェーデン語でA4の紙一面に書かねばならず、苦労した。先生に添削してもらってから提出した。

出願から正式な入学許可書を受け取るまで、どのくらい時間がかかりましたか？
約1か月半。

入学試験　現地で入学試験や面接を受けましたか？
試験、面接はなかった。

居住許可の取得　どのような方法で取得しましたか？
入国前に日本で取得。

申請時に提出した書類や、申請から取得までのおおよその日数を教えてください。
インスティテュート側から全寮制であることと、入学を認めた者であるという証明書を送ってもらった。出発1週間前に完了。大使館等が夏休みモードで、時間が掛かったのだと思う。

保険　どのような保険に入っていましたか？
保険には入らなかった。予防接種も受けなかった。

学校生活　日本の学校（大学）の授業と比べて異なる点や、スウェーデンの特色を教えて下さい。
民族音楽を自国の若者に伝承していくことを目的にしているので、少し先を行く先輩は自分が持っているもの全てを後輩に伝えたいという情熱を、先生方の態度の中に感じた。生徒たちも真面目で、能力に差が出る分野であるにもかかわらず、お互いに認め合い、助け合う姿に感銘を受けた。

授業の準備はどのようにしましたか？予習・復習にどの程度時間をかけましたか？
また日本で身につけた語学力で十分でしたか？
学びたいことは山ほどあり、教室は夜中でも出入り自由で演奏練習も可能だったので、寝る間を惜しんで予習復習をした。日本でのスウェーデン語学習では、言葉を話すスピードが遅かった。テキストに付いていたCDを同じスピードで言えるようになるまで繰返し口にした表現だけが使えた。

授業以外に勉強する際、どのような場所を利用しましたか？学校の施設（図書館、コンピュータールーム、カフェテリアなど）は充実していましたか？
自室、空いている教室、図書室。図書室は小さいながら内容は充実していた。貴重な書籍もCDやMDなどの音源もカードに記入するだけで自由に持ち出すことができ、学びたい者への信頼の厚さを感じた。当時コンピューターは4台しかインターネットに接続されていなかったので、充実していたとは言えない。また、食堂には常に飲み物があったし、リンゴなどの果物もあり、自由に食べることができた。

試験はどのように実施されましたか？また試験対策はどのようにしましたか？
試験はなかった。

プレゼンテーションやレポート（エッセイ）作成に際して、大学による語学サポートなどはありましたか？またスウェーデン独特の書き方やフォームはありましたか？
なかった。

学校全体やクラスにおける留学生や日本人の割合、また年齢層はいかがでしたか？
クラスは14名。外国人は2人で、私の他には18才のアメリカ人の女の子だった。

クラス以外の活動（クラブ、サークルなど）に参加しましたか？
そういうものはなかった。

現地の学生とどのように交流を深めましたか？大変だった点はありましたか？
英語さえ話せない彼等の親の年代の私に対して、20才前後の彼等は「面倒を見てあげなくては」という感じで接してくれ、彼等のやること全てに誘ってくれた。何が起こるか全く分からないことに恐れずに参加していったことで、いろいろなスウェーデンの文化に触れることができた。

日本からの留学生とどのように接していましたか？
日本人は自分以外にはいなかった。

他国の留学生とどのように接していましたか？また、指導教官とのやり取りで大変だった点はありましたか？
大変なことはなかった。質問したくても語学力の不足であきらめたことは何度もあり、残念だった。

日本で得た情報と異なっていた点はありましたか？

ない。

住居　留学期間中の住まいをどのように探し、どこに住みましたか？
授業を行なう本館の近くに、宿泊施設である別館があった。

トラブルはありましたか？その場合、どのように対処しましたか？
ない。

気候　気候の違い（気温や日照時間）に対して心がけた点を教えてください。
ない。

現地の食事事情　普段はどのように食事をしましたか？現地の食事や食材で苦労したことはありますか？また日本の食材は手に入りましたか？
週日は全て本館の食堂で用意され、週末は別館の食堂で自炊した。日本の食材はたまにストックホルムに行った時に手に入れた。

留学費用、送金・管理方法など　学費や諸経費はいくらでしたか？
かからなかった。

学費以外の生活費（家賃、食費、光熱費など）はどのくらいでしたか？
月に3,500クローナ、住居費と食費として支払った。

お金をどのように管理していましたか？日本から送金をしましたか？
必要に応じて、日本の銀行の自分の口座から国際カードで引き落とした。

医療　現地で受診したことはありますか？大学内で医療サービスを受けることはできますか？
かからなかった。

現地での各種相談先　相談先は事前に知っていましたか？学校の内外で問題があったとき、誰に相談しましたか？また家探しに対する支援はありましたか？
なかった。

治安　現地の情報をどのように集めましたか？注意した点はありますか？
なかった。

通信関連　パソコンや携帯電話、インターネットを現地でどのように利用しましたか？また、日本からパソコンを持参しましたか？
パソコンは持っていったが、インターネット接続の設備はなかった。携帯電話は通話できたが、電波が弱くメールの送受信には時間がかかった。

帰国後の進路　現在の所属を教えて下さい。
日本ニッケルハルパ協会　会長

あなたの留学経験は、現在の仕事や学業にどのように活かされていますか？
スウェーデンの伝統楽器ニッケルハルパの普及に強め、2007年に日本ニッケルハルパ協会を設立し、日本とスウェーデン両国の文化交流を図る活動をしている。

後輩へのアドバイス　留学生活を振り返って、「日本にいる間にしておけば良かった」と思うことはありますか？
しておいて良かったと思うことは、茶道をやっていたこと。着物を一人で着付けて、日本の文化として紹介出来てよかった。

これから留学を考えている方々へアドバイスをお願いします
私が留学したのは普通の大学の音楽や他の芸術部門とは違う民族音楽インスティテュートであります。（注：National Folk Music Cemterという、国立の音楽学校。ニッケルハルパを学ぶための1年のコースあり）私自身1年間そこに身を

置いてみて、この世界（民族音楽）はこの国の人々が守らねばならない分野であり、それを掻き乱すようなことをしてはいけないと感じました。
私が卒業して数年後、アメリカからの学生が入学後にスウェーデン語での授業は困ると言って、その1年は授業を英語でやったと聞きました。勿論スウェーデン人は英語が出来ますから、一人でも外国人がいると全員が英語で話すほどの日常語です。しかし、伝承する側のお年寄りは苦手な方も多く、民族音楽を次世代の自国の若者に伝承するなら、授業はスウェーデン語で行なわれるべきものと私は思います。
スウェーデンの大学の音楽部門の中には、民族音楽の分野もあり、外国からの留学生も数多くいます。ニッケルハルパもありますが、そこは民族音楽の伝承だけが目的なわけではありません。例えば他の国の民族音楽についてなども学びます。そちらでしたら組織もしっかりしています。外国人が入ってきてもお互いの交流によるプラスの面が出ていると思います。
しかし先ほどの例で分かるように、エリック・サールストロム・インスティテュートは組織が小さく、影響を受けやすい傾向にあります。本国での民族音楽の世界の存続が危ぶまれる今、留学される方にはその辺を十分に配慮しながら仲間に入れていただくことを望みます。
ニッケルハルパについては日本ニッケルハルパ協会のホームページ(http://www.nyckelharpajapan.org/)をご覧いただければ幸いです。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報

2012年11月30日発行 ・・・ 所報No.356

JISS所報原稿募集

JISS所報では、北欧・スウェーデンの歴史・政治・経済・社会制度などを研究しておられる方、公的機関や福祉・環境・教育などの社会活動機関、企業活動等での交流を通じて北欧・スウェーデンに興味をお持ちの方、あるいはJISSやJISS所報にご意見をお持ちの方々からのご投稿を広く募集しております。
応募方法は下記の通りですので、ふるってご投稿下さい。所報の編集方針に従って逐次掲載してゆきます。

1　応募資格
特にありません。ただし氏名・所属・連絡先は明記下さい。匿名の投稿は受付けません。

2　内容と字数
北欧・スウェーデンに関するものであれば内容は自由ですが、800字（程度）、1，600字（程度）、3，200字（程度）のいずれかの文長でお願いします。
（まだ文になっておらず、テーマ、アイデアの段階であっても、投稿ご希望であればお気軽にJISS所報編集部にご相談下さい）

3　掲載の可否と掲載時期
掲載の可否、掲載時期の判断はJISS内の所報編集部で行います。
送られた原稿は返却しませんのでご了承下さい。

4　謝礼
ご投稿への謝礼は無料ということでお願いいたします。

5　原稿の送付先
原稿は、「JISS事務局　所報編集部」宛て、Eメール、郵便、またはファックスにてお送り下さい。

Copyright (C) Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies All Rights Rese